

馬宗霍『中国經学史』 訳注（一）

橋本昭典
井澤耕一

はじめに

本稿は、中華民国期の經学者・馬宗霍（二八九七—一九七六）の代表的著作『中国經学史』の訳注である。馬宗霍は現在の湖南省衡陽市の生まれ、もとの名は驥、字は承堃。宗霍は号である。馬は郷里の船山書院で、湖南の經学大師・王闈運に、後に江南の地で、古文經学の大学者・章炳麟に師事した。『中国經学史』は、一九三六年、章炳麟主編の『制言』（半月刊、第九、十六期）に連載された『歴代經学述略』を増補して成ったものであり、同年十一月、商務印書館より「中国文化史叢書」の一冊として出版された。本書は全十二篇から成り、その詳目は、第一篇「古之六経」、第二篇「孔子之六経」、第三篇「孔門之六経」、第四篇「秦火以前之經学」、第五篇「秦火以後之經学」、第六篇「兩漢之經学」、第七篇「魏晉之經学」、第八篇「南北朝之經学」、第九篇「隋唐之經学」、第十篇「宋之經学」、第十一篇「元明之經学」、第十二篇「清之經学」である。

經学は清末に入つて、今文經学の復興とそれに伴う古文經学との対立という局面を迎えた。馬宗霍は師である章炳麟の古文經学説の影響を受けてはいるものの、「序」で自ら表明するように、史料に基づいた正確な歴史を綴ろうとしている。それはとくに秦火前後の經学を詳述する篇を設けていることから窺えよう。しかるに、本書が出た民国中期は學術の新旧交代が急速に進み、經学は旧時代の遺物としてまさに存亡の危機にあつた。他方、日本において、一九二七年に本田成之『支那經学史論』（弘文堂書房）が出版される。この書は、「經学の如きは或は将来支那本国よりも日本で保存されると云ふやうなことが無いとも限らぬと思ふ」という一文で締め括られてゐる。この事は当時の中国における經学研究に多大な衝撃を与えた。例えば、一九二八年に民国を代表する經学者・周予同は、皮錫瑞『經学歴史』注釈本（商務印書館）の序文（『經学史与經学之派別』）において本田書に触れ、中国でこのような書が出ていないことに対して「不能不刺骨地感到慚愧了（骨身に染みるほど深く恥じ入らずにはおれなくなつた）」と感懐

を述べている。一九三四年には本田の書の中国語訳が商務印書館（江俠庵訳）から、翌一九三五年には中華書局（孫俚工訳）からそれぞれ出版される。馬宗霍の書が世に出たのはその一年後であった。馬は本書を著すことよって、経学の盛衰の跡を学ぶことの意義を説いた。本書は、経学の通史としてはもちろんであるが、このような背景を考える時、近代中国における経学研究の意義、さらには当時の中日学術交流の実相の一端を探究できるものとして重要な位置を占めるのである。本訳注を通してこのような観点をも提供できるものと確信している。

なお、本訳注（二）では「序」と第一篇の前半部分を訳出した。

〔凡例〕

・本文は、一九三六年商務印書館刊行の「中国文化史叢書」本を底本とした。

・本文は適宜分節し、（一）（二）……の番号を付した。

・本文には、馬宗霍の自注が小字双行によって記されているが、本訳注では編集の都合上、字体は変えずに、【 】内に挿入する形で示した。

・訳文中の（ ）内は訳者の補注である。

馬宗霍『中国経学史』

序

「経」とは典籍の総称であり、六芸のみが名乗ったものではない。六芸とは聖人たちが抛り所とした書のことであり、孔子のみそれを手にしたのではない。しかし、孔子が六芸を教えとし、刪定を行ってからは、中国で六芸を論じる者はみな、孔子を基準とするようになった。¹六芸が基準とされて以降も、典籍は多く存在していたが、学ぶ者は必ず六芸を基準として考えるようになった。おそらく六芸のみが経という名称になったのは、ここに始まるのである。孔子が亡くなると微言は絶え、七十人の弟子がいなくなると大義は見失われた。²秦代に焚書の憂き目に遭うと、経書がそこで滅んでしまった。漢が興り、散り散りになつていた経書を収集すると、至る所から見出された。武帝の時に百家が退けられると³、そこでようやく、経は一尊の地位を確立したが、もとより完全な経からは既に遠く乖離していたのである。

学術を後世に伝えようとする学者が残つた経書を大切に保存し、文字を校訂したため、章句訓詁の学が起こつた。漢以降、約二千年の間、儒学者はいつの時代も講義を行いつつたが、学問とはそもそも変転を繰り返すものである。純粹なものもあれば、不純なものもある。とはいえ、人名や篇次は、『史記』以来ずっと記録されて絶えることはなかった。

古くは、南宋の章如愚『山堂群書考索』が諸経の伝授を遡って明らかにし、それを図にした。⁴明の朱睦㮮『授経図』は、歴代史書の「芸文志」や「儒林伝」から抜き出し、それらを章氏の図をもとにさらに拡張させたものであり⁵、「諸経の源流を解明しよ

うとしたのは、朱氏の書がまさに嚆矢といえる」と評されている。^⑥
 ただし、本書は章氏の得失を十分にわきまえたものとはなっていない。^⑦清初の万斯同『儒林宗派』は、さらに広い範囲を収録するが、ただ名前を載せるだけであり、さらには経を伝えた者に限定してはいない。^⑧朱彝尊『経義考』は周到であるが、大部で煩冗である。失われた書を著録しているものの、是非の判断がなされてはいない。これは経書解釈の書目と言うことはできるが、経学の歴史ではない。^⑨近年、皮錫瑞が『経学歴史』を著して、ようやく是非の判断が述べられるに至り、単に事柄が列挙されただけのもとはまったく異なることとなった。しかし、その持論は非常に偏っており、取り上げる資料の範囲も狭い。その書が経学開關時代を孔子から始まるとし、六経はすべて孔子の作とするのは、まったく一派の私見である。客観的な立場に立つ学者は批判しないわけにはいかないであろう。^⑩

私、宗霍は、経学がすっかり廃れてしまった今の時代に生き、斯学の道が減じようとするのを憂え、次の世代に学ぶ手立てがなくなるのを恐れる。そこで先賢を継いで、ひそかに集めたものがあり、それらを時代ごとに論述し、計十二篇となった。考察に至らぬ点があるのはわかっているが、まったくのたために陥ってはいないことを願うばかりである。本書が述べる歴代経学の盛衰、異同の由来から、読者が何か得る所があれば幸いである。民国二十五年（一九三六）、丙子の歳、初秋。衡陽の馬宗霍、南都（南京）の書齋にて記す。^⑪

注

- (1) 『史記』孔子世家に「中國言六藝者折中於夫子」とある。
- (2) 『漢書』芸文志に「昔仲尼沒而微言絶、七十子喪而大義乖」とある。
- (3) 『漢書』武帝本紀に「孝武初立、卓然罷黜百家、表章六經」とある。
- (4) 章如愚、字は俊卿、号は山堂、南宋の浙江・金華の儒学者。その『群書考索』六経門は、易、詩、書、周礼、礼記、春秋について、その学の伝授を表にしている。
- (5) 朱睦㮮（一五二〇—一五八七）、字は灌甫、号は西亭、明の河南・開封の儒学者。『授経図』は、易、書、詩、春秋、礼について、学の伝授を図表にしている。
- (6) 『四庫全書總目提要』史部『授経図』に「然朱彝尊、經義考未出以前、能條析諸經之源流、此書實爲之嚆矢」とある。
- (7) 『四庫全書總目提要』は『授経図』を「故所述列傳、止於兩漢」とする。『授経図』自序に「蓋自東漢而下、諸儒授受眇有的派、…稱爲某授某受、可乎」とあるように、伝授の記述は漢代に止まっている。
- (8) 万斯同（一六三八—一七〇二）、字は季野、号は東園、明末清初の浙江・鄞の儒学者。『儒林宗派』は、孔子から明末までの儒学者の系譜を一覧にしている。
- (9) 朱彝尊（一六二九—一七〇九）、字は錫鬯、号は竹垞、明末清初

の浙江・嘉興の儒学者。『経義考』は易、書、詩、周礼、儀礼、礼記、楽、春秋等の諸経について網羅的に記述する。その「承師」篇は学問の伝授を記述している。

(10) 皮錫瑞(一八五〇—一九〇八)、字は鹿門、清末の湖南・長沙の儒学者。一九〇六年に出版された『経学歴史』は、経学開闢時代から清代の経学復盛時代までの経学の盛衰を記述した通史である。その経学史は「経学開闢時代、斷自孔子刪定六經爲始」とする今文派に立脚したものとされる。この経学史観を批判したものととして、例えば、本田成之『支那経学史論』(一九二七年、弘文堂書房)が「然るに近時の今文学者殊に皮錫瑞は六経は皆孔子の制作に係ると云つて居る。其説の取るに足らぬことは言ふ迄もない」というのがある。

(11) 馬宗霍は、一九三一年より国民党党史編集委員会委員および国民政府立法院秘書として、南京に滞在していた。そして三四年からは、章炳麟主催の「国学講習会」教授として、たびたび蘇州に出かけ、その時の講義録をもとに「歴代経学述略」を著し、増補の後、この序を添えて『中国経学史』として出版した。

第一篇 古の六経〔その一〕

(一) 「六経は先王の陳迹なり」。これは莊子が述べた老子の言葉である。①「陳迹」とは史実である。後儒の「六経皆史」の説はこ

から出たものであろう。②それ故に、伏羲が八卦を描いて神明の徳に通じさせ、万物の本質を類型化したのが、【『易』繫辭伝に見える】③。『易』の始まりである。(伏羲が)婚姻を行うのに、対の鹿の皮を贈るようにしたのが、【『謙』周『古史考』に見える】④。「礼」の始まりである。(伏羲が)五十弦の瑟を作り、その「立本」、別名「扶来」という楽曲を作ったのが、【『世本』および『孝経緯』に見える】⑤。『楽』の始まりである。(伏羲が)「駕辯」の曲を作り、「網罟」の歌を作ったのが、【『楚辞』王逸注および元結「補楽歌」に見える】⑥。『詩』の始まりである。

【鄭玄『詩譜』序は「詩が興つたのは実に上古の世においてではない」としており⑦、伏羲の時代に詩が作られたとは考えていないようである。しかしながら一方で、大庭氏以降は詩が存在したのではないかと考えている。⑧大庭とは神農の号であり、三皇の代に当たる】このように、『易』『詩』『礼』『楽』は(伏羲以下の)三皇が既にその端緒を開いたのである。黄帝の時代になると、文字に記された歴史書が現れた。そこで、左史は言説を記し、右史は出来事を記し、細かな事柄まで備わって、その史実は「春秋」となり、言説は『尚書』となったのである。⑨そのため、『白虎通』は「春秋」の始まりを遡って黄帝以降とし⑩、『隋書』経籍志は『尚書』の始まりを遡って文字とともに起こった、としたのである。⑪思うに、五帝の時代には、六経すべてにその萌芽があった。三皇の時代は文字がなく、もしかすると文字記録が行われるようになった後に、遡ってその事柄を記したのかもし

れない。唐虞の世には明らかに文章が存在した。故に、『易』『詩』『礼』『楽』の実用はとりわけ顕著となったのである。

以上のことを『尚書』において考えてみたい。九江の大亀を献納した記述から¹²、亀卜が既に行われていたことがわかる。これは『易』が実際に行われていた例である。舜が五礼を修め、四方の諸侯に謁見し、伯夷に三礼をつかさどり、宗廟の祭祀官となるよう命じたのは¹³、『礼』が実際に行われていた例である。夔が楽をつかさどり、帝王や貴族の跡継ぎに教えたのは¹⁴、『楽』が実際に行われていた例である。詩が志(思い)を述べたものであり、歌が言葉長く伸ばしたものとされるのは¹⁵、『詩』が実際に行われていた例である。

周王朝に至ると、経書の制作はますます備わるようになった。六経を守るために、それぞれに官職が存在した。『周官』経に見えるものとして、「大宗伯」は国の礼をつかさどり、吉礼により諸国の鬼神に仕え、凶礼により諸国の憂患を悲しみ、賓礼により諸国に親しみ、軍礼により諸国と協調し、嘉礼により万民に親しんだ¹⁶。このように、『礼』にはもっぱら守るべき職掌があった。大司楽は、

樂の徳によつて公卿・大夫の子弟に、中(忠誠)、和(調和)、祇(恭敬)、庸(平常)、孝(孝順)、友(友愛)の徳を教えた。また、樂の詞によつて公卿・大夫の子弟に、興(比喩)、道(引用)、風(諷諫)、誦(歌唱)、言(発話)、語(応答)について教えた。¹⁷樂の舞によつて、「雲門」「大卷」「大咸」「大磬」「大夏」「大濩」「大武」の舞を身に付けさせた。¹⁸このように、『楽』にはもっぱら守

るべき職掌があった。大師(楽官長)は詩の六義、すなわち風、賦、比、興、雅、頌を教え、六つの徳をその根本とし、六律を基準の音とした。¹⁹瞽矇(楽官)は九徳、六詩の歌をつかさどつて、大師を補佐した。²⁰このように、『詩』にはもっぱら守るべき職掌があった。大卜(卜筮官)は、三易の法、すなわち連山、帰蔵、周易をつかさどつた。経の卦はいずれも八、重ねたものはいずれも六十四であった。²¹このように、『易』にはもっぱら守るべき職掌があった。小史(書記官)は諸侯の国々の歴史記録をつかさどつた。²²鄭衆はそれらを『春秋左氏伝』に見える「周志」や『国語』に見える「鄭書」だとする。²³外史(文書官)は畿外四方の侯国の記録をつかさどつた。鄭玄はそれらを魯の『春秋』、晋の『乗』、楚の『檣杙』^{とつう}といったものだとする。²⁴また外史は三皇五帝の書をつかさどつた。鄭玄は、それは楚の靈王が言う「三墳五典」だとする。²⁵つまり『書』と『春秋』もまた少しずつ職掌を有するようになったのである。

注

(1) 『莊子』天運篇に、「老子曰、幸矣、子之不遇治世之君也、夫六經、先王之陳跡也。豈其所以跡哉」とある。

(2) 六経を過去の事跡の記録とする見方は『莊子』に遡ることができ。なお、六経はすべて史書であるとする「六経皆史」の説は、元(かく)の郝経、明(かく)の王陽明が説き始めたとき、清の章学誠に至つて明確に主張されるようになった。

(3) 『周易』繫辭伝に、「古者包犧氏之王天下也、仰則觀象於天、俯則觀法於地、觀鳥獸之文與地之宜、近取諸身、遠取諸物。於是始作八卦、以通神明之德、以類萬物之情」とある。

(4) 譙周(一九九?—二七〇)、字は允南、三国・蜀の儒学者。その『古史考』に「乃至伏羲制嫁娶、以儷皮爲禮」とある。

(5) 『世本』作篇に「伏羲作瑟」とある。『世本』は逸書であり、この記述は『初学記』の引用に見える。また、『孝経援神契』に「伏羲、樂名扶來、亦曰立本」とある。明の孫穀、『古微書』に逸文が収録されている。なお、馬氏原文は「立基」とする。「立基」については、『周礼』春官・大司楽の疏に「孝経緯云、伏羲之樂曰立基、神農之樂曰下謀」とある。

(6) 『楚辞』大招篇「伏羲駕辯、楚勞商只」の王逸の注に「駕辯、勞商、皆曲名也」とある。元結(七三三—七七二)、字は次山、唐の武昌の詩人、文学者。「補楽歌」十首に伏羲の楽曲とされる「網罟」を収める。『元次山文集』に見える。

(7) 鄭玄『詩譜』序に、「詩之興也、諒不於上皇之世」とある。鄭玄(一二七—二〇〇)、字は康成、後漢の北海・高密の儒学者。『詩譜』は逸書である。孔広林『通德遺書所見録』に輯佚されている。『詩譜』序は孔穎達『毛詩正義』に収録されている。

(8) 鄭玄『詩譜』序は、注(7)の記述に続けて、「大庭軒轅逮於高辛、其時有亡、載籍亦蔑云」とする。孔穎達はその疏において「大庭、神農之別號。大庭軒轅、疑其有詩者。大庭以還、漸有樂器、樂器之音、逐人爲辭。則是爲詩之漸。故疑有之也」とする。

(9) 『漢書』芸文志・六芸略・春秋に「左史記言、右史記事、事爲春秋、言爲尚書」とある。『礼記』玉藻篇には「動則左史書之、言則右史書之」とある。

(10) 『白虎通』五經篇に「春秋何常也、則黃帝以來」とある。

(11) 『隋書』経籍志・経籍・書に「書之所興、蓋與文字俱起」とある。

(12) 『尚書』禹貢に「九江納錫大龜」とある。大きな龜は龜甲を用いて行う占いのために献上された。

(13) 『尚書』舜典に見える。

(14) 『尚書』舜典に見える。ただし、伯夷は「伯拜稽首、讓于夔龍」とその任務を譲っている。

(15) 『尚書』舜典に「詩言志、歌永言……、神人以和」とある。

(16) 『周礼』春官・大宗伯に見える。

(17) 『周礼』春官・大司楽に見える。

(18) 『周礼』春官・大司楽に見える。以上は黄帝、堯、舜、禹、湯王、武王の六代の楽とされる。「雲門」「大卷」は黄帝の時代の楽、「大咸」は堯の楽、「大磬」は舜の楽、「大夏」は禹の楽、「大濩」は湯王の楽、「大武」は武王の楽とされる。鄭玄注を参考。

(19) 『周礼』春官・大師に見える。「六義」は『毛詩』大序に見え、孔疏に「風、雅、頌者、詩篇之異體、賦、比、興者、詩文之異辭耳」とある。「六德」は『周礼』地官・大司徒に「一曰六德、知、仁、聖、義、忠、和」とある。楽律は十二あり、陽を律とし、陰を呂とする。「六律」は黄鍾、大族、姑洗、蕤賓、夷則、無射である。『周礼』春官・大師に見える。

(20) 『周礼』 春官・瞽矇に見える。

(21) 『周礼』 春官・大卜に見える。

(22) 『周礼』 春官・小史に見える。

(23) 『周礼』 春官・小史の鄭玄注に、「鄭司農云志謂記也、春秋傳所謂周志、國語所謂鄭書之屬是也」として、鄭衆の説が引用されている。鄭衆(？―183)、字は仲師、後漢の開封の學者。官は大司農に至つたため、鄭司農と呼ばれる。また、『春秋左氏伝』文公二年の伝に、「周志」の一文が引用されている。「周志」は滅んで伝わらないが、周の歴史記録とされる。なお、鄭衆は「國語所謂鄭書」とするが、現行の『國語』には「鄭書」の名は見えない。『春秋左氏伝』襄公二十二年に「子産曰、……鄭書有之曰、安定國家、必大焉先」として「鄭書」が引かれている。杜預の注に「鄭國史書」とある。また、昭公二十八年に、「叔游曰、鄭書有之、惡直醜正、實蕃有徒」とある。

(24) 『周礼』 春官・外史及びその鄭玄注に見える。

(25) 『周礼』 春官・外史及びその鄭玄注に見える。「三墳五典」は、『春秋左氏伝』昭公十二年に「王(楚靈王)曰、是良史也、子善視之、是能讀三墳、五典、八索、九丘」とある。

(二)

思うに、三皇五帝の時代はそれぞれ世情を異にし、礼楽が踏襲されることはなかった。「周は二代に監み、郁郁乎として文なる

かな」¹⁾とあるように、自ら一代の法典を築き上げたのであるが、実際には前の二代(夏・殷)の制度をそこに保存していたのであった。それゆえ、六芸の内容は周に至つて、とりわけ豊富になつたのである。

章学誠は、「周公は『周礼』によつて伏羲、黄帝、堯、舜以来の制度を集成した」と言う。²⁾これはほぼその通りであろう。ところで、六芸にはそれぞれ職掌があつたが、それらはすべて礼官に属した。だからこそ、(章は)「六芸はもとより先王の政典であつた」とも言うのである。³⁾礼とは、国家の政典を統括するものであり、まさに班固が言う「六経の道は根が同じであり、礼楽の効果は素早く現れる」⁴⁾である。六芸は周の時代に大いに備わるようになり、周の盛時には、史官(記録官)がそれを管理し、故府(文書保存庫)にそれを保存した。⁵⁾【龔自珍は言う。「六経は、周の史官から生みだされた大宗(嫡子)である。『易』は卜筮の史官、『書』は言葉を記す史官、『春秋』は出来事を記す史官である。』(『詩』の)「風」は史官が民間から採集し、それらを編集して竹帛に記し、司楽(音楽官)に与えたものである。(『詩』の)「雅」「頌」は、史官が士大夫から採集したものである。『礼』は、その時代の律令であり、史官が故府に保存したものである。それによつて必要に応じ王に教え論したのである。『小学』(文字の解釈)は、外史(外交文書をつかさどる官)が文書を地方へ行き渡らせた(ことで発展した)。瞽史(下級音楽官と記録官)がそれらを賓客の振る舞いとして教えたのである。今は宗伯(神祇官)が礼を

統括しているとされるが、礼は口頭で保存できるものではない。儒学者は、それを史官から得たのであり、宗伯から得たのではない。楽は、司楽がこれを統括しているが、そもそも楽は口と耳で保存できるものではない。儒学者はそれを史官から得たのであり、司楽から得たのではない。そのため、六経は周の史官から生みだされた大宗（嫡子）といえるのである。^⑬劉師培は言う。^⑭「韓宣子が魯に行った時に、太史のところを書を見せてもらい、はじめて易の象を見た」とあるように^⑮、『易』は史官によって管理されていたのである。三皇五帝の書は外史がつかざどつており^⑯、『左伝』に「史官は書を誦えた」とあるように^⑰、『書』は史官によって管理されていたのである。「風」の詩は天子の補佐役が採集し^⑱、魯の「頌」は史克によって作られたのであり^⑲、「祈招」の詩は左史倚相から聞き取られているように^⑳、『詩』は史官によって管理されていたのである。韓宣子が魯の史官のところを書を調べた時に、あわせて『春秋』を見ており^㉑、孟子が『春秋』を解釈する際に、「その文は史官の手になったものである」と述べているように^㉒、『春秋』も史官によって管理されていたのである。老聃は周の史官となつて礼を明らかにし、萇弘は周の史官となつて楽を明らかにした。^㉓とすると『礼』『楽』も史官によって管理されていたのである。史佚は『爾雅』を子に教えたので、「小学」もまた史官によって管理されていたのである^㉔。

それぞれの間は官にあつた。思うに、官にあつたからこそ、それを教えとして施すと、道は一つとなり、教化は均一となり、

それによつて政治を行うと、風俗が安定し、世に秩序がもたらされたのである。周が衰えると、官の守りが荒廃して、六芸の道は絶え、諸子が競つて鳴くようになった。孔子の時代には既に六芸は損なわれており、完全ではなかつたのである。

『詩』については、九徳六詩の歌^㉕は、もとはあわせて十五種であつた。^㉖『史記』によれば、孔子が見た古詩はなお三千篇余りあつたが、それに取捨選択を加えて、風、雅、頌の三者だけを残したということである。^㉗（これにより）九歌の篇章を見ることができなくなつただけではなく、比、賦、興もまた区別するところが難しくなつた。こうして三千篇の中で既に九歌および比、賦、興（の詩）は失われていたのである。もし実際に残つていたのならば、それは大師が教えていたものであつたらう。^㉘孔子はその六詩を受け入れずに、そのうち三つを削り去つた。おそらく、十五流を混ぜ合わせて数えたのであろう。その数は三千よりもつと多くあつたはずである。^㉙『鄭志』に、「張逸が、どの詩が比、賦、興に近いかと尋ねた。（鄭玄が）答えて言うには、比、賦、興については、呉の季札が詩を見た際、既に歌われていない」とあるが^㉚、この記述は全く正しい。思うに、既に歌われていないというのは、きつと失われていたのであろう。そこでまた、「孔子が詩を編集する時に、風、雅、頌の中に合わせて入れてしまい、区別するのが難しくなつた」と言うのである。^㉛そのため後人はますます惑うことになつた。世の儒学者はこれより風、雅、頌は形態の相違であり、比、賦、興は歌辞（修辞）の相違ではないかと

考えるようになった。しかし、六詩の経文は、(編集されて後に)滅んだものなのである。すなわち比、賦、興はそれぞれ独立して(詩の)名称をもち、各々が区別可能であつて、風、大雅、小雅、頌の四始とは別の詩であつたということがわかつていない。詳しくは、餘杭・章炳麟の「六詩説」に見える²²⁾】

『書』については、もとは三皇五帝の書の中に保存されていた。緯書の『尚書璇璣鈴』に「孔子は書を求めて、黄帝の玄孫・帝魁の書を得た。秦の穆公まで計三千二百四十篇であつた」とある。

【『尚書』序の孔疏の引用に見える】この記述は完全に信じることはできないが、今の『尚書』は堯典から始まつているので、三皇五帝の書が、当時既に見ることができなかったことがわかる。

【朱子は、『周礼』外史に三皇五帝の書を掌つたとあるが、これは周公が記録したものであるから、きつと虚妄ではない。もし全篇が完備していれば、孔子も削ることはなかつたはずである。その簡編に脱落があり、完全には理解できなかったのかもしれない』と述べている²³⁾】

『春秋』については、もとは四方の国々の歴史書の中に保存されていた。つまり、周の初めに制定された公侯伯子男の五等の封により、実に千七百余りの国が立てられたが、それぞれに史書があつたはずである。太史公の年表はわずかに十二諸侯を記すのみであり、その他世家に記述のないものもある。もし秦の戦乱によつて失われたと言うのなら、どうして十二諸侯の事績だけが幸いにも残つたのだろうか。おそらく孔子の時にはきつと既に完備し

ておらず、『春秋』が伝えることも、もはや十分の一にも及ばなくなつてしまつたからであろう。

『礼』『楽』の二者については、諸侯は自分に都合の悪いものを嫌つた。そこでみなその書籍を消し去ろうとした。そのため欠損がとりわけひどいのである。【『漢書』芸文志に「帝王の質と文

とは時代によつて増減があつた。周は細かな事に渡るまで乱れるのを防ぎ、事ごとに礼を制定した。故に、礼経(根本の礼)は三百種、威儀(細かな儀礼)は三千種、と言われるのである。周が衰えると、諸侯は規範を蔑ろにするようになり、自身に都合の悪い礼を嫌つて、みながその記録を捨て去ろうとした。つまり孔子の時には既に完備していなかつたのである』とある。また、「礼楽の二者は常にあわせて行われており、周が衰えるとともに損なわれた。とりわけ楽はほとんど消滅しかつたが、音律には節が備わつていた。しかしそれも鄭、衛の新楽によつて乱されることとなつた。そのため後世に伝わることはなかつたのである』とある²⁴⁾】孔子はそこで、車に乗つて周に赴いた。周の礼を老聃に尋ね、楽を萇弘に問うた。²⁵⁾あちこちに探し求めてわずかにその一部を得たのである。しかし、孔子の言葉に「夏の礼について、私は論じることができるが、杞の国については十分に明らかにすることができない。殷の礼について、私は論じることができるが、宋の国については十分に明らかにすることができない。文献が足りないためである。文献が十分に残っていれば、私は明らかにすることができるとある。²⁶⁾このように、二代の礼は、杞と宋の

国が夏と殷の末裔であるにもかかわらず、既に明らかにすることができなかつた。そのため、さらに「殷は夏の礼にもとづいてるので、増減したところを知ることができる。周は殷の礼にもとづいてるので、増減したところを知ることができる」²⁷⁾と言つたのである。思うに、孔子が「論じることができると言うのも、周の礼から推し測つたのだらう。

『楽』については、もとは六代（黄帝・堯・舜・禹・湯・武王）には保存されていた。孔子が言うには、「韶は美を尽くし、善を尽くしている。武は美を尽くしているが、善を尽くしてはいない」²⁸⁾とあり、「楽は韶の舞を演奏する」²⁹⁾とある。他について大半は言及されていないが、あるいはやはりその時には伝わっていなかつたのかもしれない。

ただかつての三易（連山・歸蔵・周易）だけが損なわれることがなかつた。孔子が学んだのは周易であつたが、『礼記』には「孔子は夏の道を得ようとして『夏時』を手に入れ、殷の道を得ようとして『乾坤』を手に入れた」³⁰⁾とある。『乾坤』とは「歸蔵」の書である。『連山』は艮の卦から始まるが、艮とは人である。夏は建寅の月を正月とし、これを人統と呼んだ。³¹⁾故に、先儒は「夏時」とは「連山」を適用したものだと考えている。【『左伝』襄公九年に、穆姜が占つてもらうと、艮の八の卦を得た、とあり、杜預の注に「連山、歸蔵、周易を合わせて用いている」とある。³²⁾これは春秋時代に三易がすべて通行していたことの証左である。桓譚『新論』に、「連山は蘭台に保存され、歸蔵は太卜に保存され

ている」とある。³³⁾そうすると漢の初めにも三易はなお存在していたことがわかる】
思うに、古代の六経について、孔子の時代に存在しており考証が可能であつたものは、おおむね以上のものである。

注

- (1) 『論語』八佾篇の文。
- (2) 章学誠『文史通義』原道上に見える。章学誠（一七三八一—一八〇一）、字は实斋、号は少巖、清の浙江・会稽の学者。
- (3) 章学誠『文史通義』易教上に見える。
- (4) 『漢書』礼楽志に見える。
- (5) 龔自珍「古史鈎沈」「論二」に見える。龔自珍（一七九二—一八四一）、字は人、号は定庵、清の浙江・仁和の儒学者。
- (6) 劉師培「古学出於史官論」に見える。劉師培（一八八四—一九一九）、字は申叔、号は左龔、清の江蘇・儀徵の儒学者。
- (7) 『左伝』昭公二年の伝に見える。
- (8) 『周礼』春官・外史に「外史……掌三皇五帝之書」とある。
- (9) 『左伝』襄公十四年の伝に見える。ただし、『左伝』原文は、「史爲書、瞽爲詩、工誦箴諫（史は書を爲り、瞽は詩を爲り、工は箴諫を誦す）」であり、史官は出来事を記録したのである。
- (10) 『礼記』王制篇に「命大師陳詩、以觀民風」とある。
- (11) 『詩経』魯頌・駉の小序に「史克作是頌」とある。
- (12) 『左伝』昭公十二年の伝に見える。「祈招」は逸詩。

- (13) 『左伝』昭公二年の伝に見える。
- (14) 『孟子』離婁章句下に見える。
- (15) 『礼記』樂記篇に、樂について「丘之聞諸萇弘、亦若吾子之言是也」とある。
- (16) 九徳の歌については、『左伝』文公七年の伝に「九功之徳皆可歌也、謂之九歌」とある。九歌は禹の時代の音楽とされる。『尚書』大禹謨に「勸之以九歌」とある。六詩は六義のこと。
- (17) 比、賦、興を修辭としてではなく風、雅、頌と同様の形体として捉え、九徳六詩は十五種類の詩であつたとする。注(22)を参照。
- (18) 『史記』孔子世家に、「古者詩三千餘篇、及至孔子、去其重。……故曰、關雎之亂以爲風始、鹿鳴爲小雅始、文王爲大雅始、清廟爲頌始。三百五篇孔子皆弦歌之、以求合韶武雅頌之音」とある。
- (19) 『周礼』春官・大師に「大師……教六詩。曰風、曰賦、曰比、曰興、曰雅、曰頌。以六徳爲之本」とある。また、瞽矇に「瞽矇……掌九徳六詩之歌、以役大師」とある。
- (20) 『鄭志』『毛詩志』(『毛詩正義』の引)に見える。「季札觀樂」は『左伝』襄公二十九年の伝に見える。
- (21) 『鄭志』『毛詩志』に見える。
- (22) この自注はほぼ章炳麟の「六詩説」に拠つている。「六詩説」は『檢論』に見える。章炳麟(一八六九—一九三六)、字は枚叔、号は太炎、清の浙江・餘杭の儒學者。
- (23) 『朱文公文集』「雜著」『尚書』に見える。
- (24) 『漢書』芸文志・礼、樂に見える。なお、馬氏引用文「諸侯好諭

- 法度」は、『漢書』原文は「諸侯將諭法度」。
- (25) 『史記』老子伝、『礼記』曾子問篇、樂記篇等に見える。
- (26) 『論語』八佾篇に見える。
- (27) 『論語』為政篇に見える。
- (28) 『論語』八佾篇に見える。
- (29) 『論語』衛靈公篇に見える。
- (30) 『礼記』礼運篇に「孔子曰、我欲觀夏道、是故之杞、而不足徵也。吾得夏時焉。我欲觀殷道、是故之宋、而不足徵也。吾得坤乾焉。坤乾之義、夏時之等、吾以是觀之」とある。
- (31) 夏は建寅の月(十三月)を正月とした。その曆は人統とされる。殷は建丑の月(夏の十二月)を正月とした。その曆は地統とされる。周は建子の月(夏の十一月)を正月とした。その曆は天統とされる。『漢書』劉向伝、律曆志を参考。
- (32) 『左伝』襄公九年の伝に「穆姜、薨於東宮。始往而筮之、遇艮之八」とあり、杜預の注に「周禮大卜掌三易、然則雜用連山歸藏周易」とある。
- (33) 桓譚「新論」正經篇に見える。桓譚(前一三一—五六)、字は君山。後漢の沛国・相の儒學者。
- (訳注者付記)
本訳稿は平成二十八年度—三十一年度科学研究費基盤研究(C)(課題番号一六K〇二一五四)の研究成果の一部である。(本学教授/茨城大学教授)